

日蓮大聖人御書全集

せんにちあまごぜんごへんじ

千日尼御前御返事

しんじつほうおんぎよう こと

（真実報恩経の事）

新版
1735
〜
1743

せん にち あまご ぜんご へんじ しんじつ ほう おんぎよう こと

千日尼御前御返事（真実報恩経の事）

こうあんがんねん

がつ にち

さい

せん にち あま

弘安元年（'78） 7月28日

57歳 千日尼

こうあんがんねんたいさいいつちのえとらしちがつむいか さどのくに せん にち あま もう

弘安元年太歳戊寅七月六日、佐渡国より千日尼と申す

ひと おな にほんこくこうしゅうはきいのごうみのぶさん もう しんざん おな

人、同じく日本国甲州波木井郷身延山と申す深山へ、同じ

おとこ あぶつぼう つか おく たも おんふみ い によにん

く夫・阿仏房を使いとして送り給う御文に云わく「女人の

ざいしよう ぞん そうら ごほうもん ほけきよう によにん

罪障はいかがと存じ候えども、御法門に法華経は女人の

じようぶつ 先 そうら ばんじ 恃

成仏をさきとするぞと候いしを、万事はたのみまいらせ

そうら とううんぬん

候いて」等云々。

そ ほけきよう もう そうろうおんきよう たれほとけ と たま そうろう

夫れ、法華経と申し候御経は、誰仏の説き給いて候

思 そつら

にほんこく

にし

かんど

にし

ぞとおもい候えば、この日本国より西、漢土よりまた西、

りゆうさ そうれい もう

遙

にし

がっし

もう

くに

流沙・葱嶺と申すよりはまたはるか西、月氏と申す国に

じようぼんおう もう

だいおう

たいし

じゆうく

とし

くらい

滑

たま

浄飯王と申しける大王の太子、十九の年、位をすべらせ給

だん 特 せん もう

やま

い

ごしゆつけ

さんじゆう

ほとけ

成

いて、檀どく山と申す山に入り御出家、三十にして仏とな

たも み こんじき へん

たましい

さんぜ

鑑

たま

らせ給う。身は金色と変じ、神は三世をかがみさせ給い、

過

きた

鏡

懸

たま

すぎにしこと、来るべきこと、かがみにかけてさせ給いてお

ほとけ

ごじゆうよねん

あいだ

いちだいいつさい

きようぎよう

と

置

わせし仏の、五十余年が間、一代一切の経々を説きおか

たも

せ給う。

いつさい

きようぎよう

ほとけ

めつご

いつせんねん

あいだ

がっしこく

この一切の経々、仏の滅後一千年が間、月氏国に

漸 広 そちら

ようやくひろまり候いしかども、いまだ漢土・日本国等へ

きた そちら

は来り候わず。

ほとけめつど のちいつせんじゅうごねん もう

かんど ぶつぼうわた

仏滅度して後一千十五年と申せしに、漢土へ仏法渡りは

そちら

ほけきよう

たま

じめて候いしかども、またいまだ法華経はわたり給わず。

ぶつぼう かんど

にひやくよねん およ

がっし かんど

仏法、漢土にわたりて二百余年に及んで、月氏と漢土と

ちゅうかん きじこく もう

か くに うち くまら 炎

の中間に龜茲国と申す国あり。彼の国の内に鳩摩羅えん

さんぞう もう ひと みこ くまらじゅう もう

ひと か くに がっ

三蔵と申せし人の御子・鳩摩羅什と申せし人、彼の国より月

し い しゆりやそまさんぞう もう ひと

ほけきよう 授

氏に入り、須利耶蘇磨三蔵と申せし人にこの法華経をさず

たま さず たま とき みこと い

ほけきよう

かり給いき。その授け給いし時の御語に云わく「この法華経

とうほく くに えん 深

うんぬん

みこと たも

がつし

は東北の国に縁ふかし」と云々。この御語を持つて月氏よ

とうほう

かんど

渡

たま

そうろう

り東方、漢土へはわたし給い候なり。

かんど

ぶつぼう

にひやくよねん

こうしんおう

ぎよう

わた

漢土には、仏法わたりて二百余年、後秦王の御宇に渡つ

そうら

て候いき。

にほんこく

にんのうだいさんじゅうだいきんめいてんのう

み よしろしめすじゅうさんねん

日本国には、人王第三十代欽明天皇の御宇 治 十三年

みずのえさるじゅうがつじゅうさんにちかのとりのひ

にし

ひやくさいこく

もう

くに

壬申十月十三日辛酉日、これより西、百済国と申す国

せいめいおう

にほんこく

ぶつぼう

かんど

ぶつぼう

より、聖明皇、日本国に仏法をわたす。これは、漢土に仏法

しひやくねん

ほとけ

めつごいつせんしひやくよねん

なか

わたつて四百年、仏の滅後一千四百余年なり。その中にも

ほけきよう

にんのうだいさんじゅうにだいやうめいてんのう

たい

法華経はましまししかども、人王第三十二代用明天皇の太

し しょうとくたいし もう ひと かんど つか 遣 ほけきよう
子・聖徳太子と申せし人、漢土へ使いをつかわして、法華經

取 寄

をとりよせまいらせて日本国に弘通し給いき。それより

このかた しちひやくよねん

来、七百余年なり。

ほとけめつど

のち

にせんにひやくさんじゅうよねん

そうろううえ

仏滅度して後はすでに二千二百三十余年になり候上、

がっし かんど にほん やまやま かわかわ かいかいとお 隔 ひとびと

月氏・漢土・日本、山々・河々・海々遠くへだたり、人々・

しんしん くにぐに おのおのべつ

ことば 変

品 異

心々・国々、各々別たりて、語かわり、しなことなれば、

ぶつぽう

みこころ

われ

ぼんぷ

わきま

そうろう

いかでか仏法の御心をば我ら凡夫は弁え候べき。ただ

きようぎよう

もんじ

ひ あ

し

いつさいきよう

経々の文字を引き合わせてこそ知るべきに、一切経は

様々

そうら

ほけきよう

もう

おんきよう

はちかん

ようように候えども、法華經と申す御經は八卷まします。

るつう ふげんぎよう じよぶん むりようぎきよう おのおのいつかんいじよう おんきよう

流通に普賢経、序分に無量義経、各一卷已上。この御経

ひら み そうら あき かがみ わ おもて

を開き見まいらせ候えば、明らかなる鏡をもつて我が面

み ひい そうもく いろ わきま 似

を見るがごとし。日出でて草木の色を弁うるににたり。

じよぶん むりようぎきよう み そうら しじゆうよねん

序分の無量義経を見まいらせ候えば、「四十余年にはい

しんじつ あらわ もう きようもん ほけきよう だいいち まき

まだ真実を顕さず」と申す経文あり。法華経の第一の巻の

ほうべんぼん はじ せそん ほうひさ のち かなら まさ しんじつ

方便品の始めに「世尊は法久しくして後、要ず当に真実を

と もう きようもん だいし まき ほうとうほん

説きたもうべし」と申す経文あり。第四の巻の宝塔品には

みようほけきよう みな しんじつ もう みようもん だいしち

「妙法華経は、皆これ真実なり」と申す明文あり。第七の

まき ぜつそう ぼんてん いた もう きようもん かつかく ほか

巻には「舌相は梵天に至る」と申す経文赫々たり。その外

きよう

ほか

前

後

並

きようぎよう

ほし

は、この経より外の、さきのちならべる経々をば、星に

たと

こうが

たと

しょうおう

たと

しょうせん

たと

ほけきよう

譬え、江河に譬え、小王に譬え、小山に譬えたり。法華経

つき

たと

ひ

たと

たいかい

たいせん

だいおうとう

たと

たま

をば、月に譬え、日に譬え、大海・大山・大王等に譬え給え

り。

ことば

わたくし

ことば

みな

によらい

きんげん

この語は私の言にはあらず、皆、如来の金言なり。

じつぼう

しよぶつ

ごひようじよう

ぬこと

十方の諸仏の御評定の御言なり。

いっさい

ぼさつ

にじよう

ぼんてん

たいしやく

いま

てん

か

みようきよう

一切の菩薩・二乗・梵天・帝釈、今の天に懸かつて明鏡

にちがつ

みたま

き

たま

にちがつ

のごとくまします日月も、見給いき、聞き給いき。その日月

みこと

きよう

載

そうろう

がつし

かんど

にほんこく

の御語もこの経にのせられて候。月氏・漢土・日本国の

古 かみ みな ざ 列 かみがみ

ふるき神たちも皆、その座につらなりし神々なり。

てんしやうだいじん はちまんだいぼさつ くまの 鈴 鹿 とう にほんこく かみがみ

天照太神・八幡大菩薩・熊野・すずか等の日本国の神々も

争 たも

あらそい給うべからず。

きやうもん いっさいきやう すぐ ちはし もの おう しし

この経文は一切経に勝れたり。地走る者の王たり、師子

おう そらと もの おう わし なむあみだぶつきやう

王のごとし。空飛ぶ者の王たり、鷲のごとし。南無阿弥陀仏経

とう 雉 うさぎ わし 摑 なみだ

等は、きじのごとし、兎のごとし。鷲につかまれては涙を

流 しし 責 はら 断

ながし、師子にせめられては腹わたをたつ。

ねんぶつしや りつそう ぜんそう しんごんしとう ほけきやう

念仏者・律僧・禅僧・真言師等、またかくのごとし。法華経

ぎやうじや あ 色 うしな たましい 消

の行者に値いぬれば、いろを失い、魂をけすなり。

ほけきよう

もう

おんきよう

ほうもん

かかるいみじき法華經と申す御經はいかなる法門ぞと

もう

いち

まき

ほうべんぼん

打

始

ぼさつ

にじよう

ぼんぷ

申せば、一の卷の方便品よりうちはじめて、菩薩・二乗・凡夫、

みなほとけ

成

たも

様

説

そうら

皆仏になり給うようをとかれて候えども、いまだその

証

しるしなし。

はじ

きやくじん

そうみよう

麗

こころ

たとえば、始めたる客人が、相貌うるわしくして心も

潔

くち

利

そうら

うたが

いさぎよく、よく口もきいて候えば、いうこと疑いなけ

前

み

ひと

現

こと

れども、さきも見ぬ人なれば、いまだあらわれたる事なけ

ことば

しん

とき

ことば

任

れば、語のみにては信じがたきぞかし。その時、語にまか

おお

たびたび合

そうら

のち

頼

せて大いなること度々あい候えば、さては後のこともたの

もしなんど申すぞかし。もう

いっさいしん

しん

だいご

まき

そくしんじようぶつ

もう

一切信じて信ぜられざりしを、

第五の巻に即身成仏と申

いっきようだいいち

かんじん

たと

黒

もの

しろ

す一経第一の肝心あり。

譬えば、

くろき物を白くなすこと

うるし

ゆき

ふじよう

しようじよう

じよくすい

によいしゆ

漆を雪となし、不浄を清浄になすこと濁水に如意珠を

い

りゆうによ

もう

しようじや

げんしん

ほとけ

成

入れたるがごとし。竜女と申せし小蛇を現身に仏になし

とき

いっさい

なんし

ほとけ

てましましき。この時こそ、一切の男子の仏になることを

うたが

もの

そうら

ば疑う者は候わざりしか。

きよう

によにんじようぶつ

てほん

説

されば、この経は女人成仏を手本としてとかれたりと

もう

にほんこく

ほけきよう

しようぎ

ぐつう

はじ

申す。されば、日本国に法華経の正義を弘通し始めまし

えいざん　こんぽんでんぎようだいし

しゃく　たも

せし叡山の根本伝教大師の、このことを釈し給うには、

のうけ　しよけ

りやつこうな

みようほうきようりき

そくしんじようぶつ

「能化・所化ともに歴劫無し。妙法経力もて即身成仏す」

とう　かんど　てんだいちしやだいし

ほけきよう

しようぎ

読

始

たま

等。漢土の天台智者大師、法華経の正義をよみはじめ給い

たきよう

なん

き

によ

き

ないしこんきよう

しには、「他経は、ただ男にのみ記して女に記せず乃至今経

みなき

とううんぬん

いちだいしようぎよう

なか

ほけきようだいいち

は皆記す」等云々。これは一代聖教の中には法華経第一、

ほけきよう

なか

によにんじようぶつだいいち

判

たも

法華経の中には女人成仏第一なりとことわらせ給うにや。

にほん

いつさい

によにん

ほけきよう

ほか

いつさいきよう

されば、日本の一切の女人は、法華経より外の一切経に

によにんじようぶつ

きら

ほけきよう

によにんじようぶつ

は女人成仏せずと嫌うとも、法華経にだにも女人成仏

許

苦

ゆるされなば、なにかくるしかるべき。

にちれん

受

じんしん

あ

しかるに、日蓮は、うけがたくして人身をうけ、値いが

ぶつぼう

あ

たてまつ

いっさい

ぶつぼう

なか

ほけきよう

あ

たくして仏法に値い奉る。一切の仏法の中に法華經に値

そうろう

おんとか

思

ふぼ

おん

こくしゆ

いまいらせて候。その恩徳をおもえば、父母の恩、国主の

おん いっさいしゆじよう

おん

ふぼ

おん

なか

じぶ

てん

たと

恩、一切衆生の恩なり。父母の恩の中に、慈父をば天に譬

ひも

だいち

たと

分

なか

え、悲母を大地に譬えたり。いずれもわけがたし。その中、

ひも

だいおん

殊

報

悲母の大神ことにほうじがたし。

ほう

思

げてん

さんぶんごてん

こうきようとう

これを報ぜんとおもうに、外典の三墳五典・孝經等によ

ほう

げんざい

養

ごしよう

助

つて報ぜんとおもえば、現在をやしないで後生をたすけが

み

たましい

ないてん

ぶつぼう

い

たし。身をやしない魂をたすけず。内典の仏法に入つて

ごせん しちせんよかん しょうじよう だいじよう によにんじようぶつ 難

五千・七千余卷の小乗・大乘は、女人成仏かたければ

ひも おんほう しょうじよう によにんじようぶついつこう ゆる

悲母の恩報じがたし。小乗は女人成仏一向に許されず。

だいじようきよう じようぶつ おうじよう ゆる

大乘経は、あるいは成仏、あるいは往生を許したるよ

ほとけ かりこと じつじ ほけきよう

うなれども、仏の仮言にて実事なし。ただ法華経ばかりこ

によにんじようぶつ ひも おん ほう まこと ほうおんぎよう そうち

そ、女人成仏、悲母の恩を報ずる実の報恩経にては候え

みそうら ひも おん ほう きよう だいまく

と見候いしかば、悲母の恩を報ぜんために、この経の題目

いつさい によにん とな がん

を一切の女人に唱えさせんと願ず。

にほんこく いつさい によにん かんど ぜんどう にほん けいしん

それに日本国の一切の女人は、漢土の善導、日本の恵心・

ようかん ほうねんとう 賺 せん なんみようほうれんげきよう

永観・法然等にすかされて、詮とすべきに南無妙法蓮華経を

いつこく　いつさい　によにんいちにん　とな

ば一国の一切の女人一人も唱うることなし。ただ南無

なむ

あみだぶつ　いちにち　いっぺん　じつぺん　ひやくせんあんおくへん　ないしさんまん　じゅうまん

阿弥陀仏と一日に一返・十返・百千万億反、乃至三万・十万

べん　いっしょう　あいだ　ちゅうやじゅうにとき　たじ　どうしんけんご

反、一生が間、昼夜十二時にまた他事なし。道心堅固な

によにん　あくにん　によにん　みだねんぶつ　ほん

る女人も、また悪人なる女人も、弥陀念仏を本とせり。わ

ほけきよう　事　によにん　つき待

ずかに法華経をこととするようなる女人も、月まつまでの

手　遊　思　なん　隙　こころ　こころ　なん

てすさび、おもわしき男のひまに、心ならず心ざしなき男

会　にほんこく　いつさい　によにん　ほけきよう

にあうがごとし。されば、日本国の一切の女人、法華経の

おんこころ　かな　いちにん

御心に叶うは一人もなし。

わ　ひも　せん　ほけきよう　とな　みだ　こころ

我が悲母、詮とすべき法華経をば唱えずして弥陀に心を

懸

ほけきよう

ほん

助

たも

みだねんぶつ

かけば、法華経は本ならねばたすけ給うべからず、弥陀念仏

によにん

ほう

かなら

じごく

お

たも

は女人たすくる法にあらず、必ず地獄に堕ち給うべし。い

歎

わ

ひも

かんがせんとなげきしほどに、我が悲母をたすけんために、

みだねんぶつ

むけんじごく

ごう

ごぎやく

ごぎやく

弥陀念仏は無間地獄の業なり。五逆にはあらざれども、五逆

過

ふぼ

ころ

ひと

にくしん

破

にすぎたり。父母を殺す人は、その肉身をばやぶれども、

ふぼ

ごしよう

むけんじごく

い

父母を後生に無間地獄には入れず。

いま

にほんこく

によにん

かなら

ほけきよう

ほとけ

成

今、日本国の女人は必ず法華経にて仏になるべきを、

誑

いつこう

ばむあみだぶつ

あく

たぼらかして一向に南無阿弥陀仏になしぬ。悪ならざれば、

賺

ほとけ

たね

ほとけ

みだ

すかされぬ。仏になる種ならざれば、仏にはならず。弥陀

ねんぶつ しょうぜん

ほけきよう だいぜん うしな

しょうぜん ねんぶつ

念仏の小善をもつて法華經の大善を失う。小善の念仏は

だいあく ごぎやくざい 過 たと しょうへい まさかど かんとうはちか

大悪の五逆罪にすぎたり。譬えば、承平の将門は関東八箇

こく 打平 てんぎ さだとう おうしゆう打 止 たみ おう とお

国をうたえ、天喜の貞任は奥州うちとどめし、民を王へ通

ちようてき

遂 滅

ぜざりしかば、朝敵となりてついにほろぼされぬ。これら

ごぎやく 過 むほん

は五逆にすぎたる謀反なり。

いま にほんこく ぶつぼう いろ 変 むほん

今、日本国の仏法もまたかくのごとし。色かわれる謀反な

ほけきよう だいおう だいにちきよう かんむりようじゆきよう

り。法華經は大王、大日經・觀無量寿經、真言宗・

じようどしゆう ぜんしゆう りつそうとう かれがれ しょうきよう 依 ほけきよう

浄土宗・禅宗・律僧等は、彼々の小經によつて法華經の

だいおんてき

大怨敵となりぬ。

にほん いっさい によんとう わ へんろ 愚

しかるを、日本の一切の女人等、我が心のおろかなるを

し われ 助 にちれん 敵 思 だいおんてき

ば知らずして、我をたすくる日蓮をかたきとおもい、大怨敵

ねんぶつしや ぜん りつ しんこんしとう ぜんちしき 誤

たる念仏者・禅・律・真言師等を善知識とあやまてり。た

にちれん だいおんてき 思

すけんとする日蓮、かえりて大怨敵とおもわるるゆえに、

によん 挙 こくしゆ ざんげん いずのくに 流 うえ

女人こそりて国主に讒言して伊豆国へながせし上、また

さどのくに

佐渡国へながされぬ。

にちれん がん い にちれん まった あやま

ここに日蓮、願じて云わく「日蓮は全く誤りなし。たと

ひがごと にほんこく いっさい によん たす がん

い僻事なりとも、日本国の一切の女人を扶けんと願ぜる

こころざし 捨 いかにいわんや ほけきよう

志はすてがたかるべし。いかにいわんや、法華経のまま

もう

いっさい

によにんとう

しん

に申す。しかるを、一切の女人等、信ぜずはさてこそある

にちれん

打

にちれん

ひがごと

しゃか

べきに、かえりて日蓮をうたする。日蓮が僻事か。釈迦・

たほう

じつぼう

しよぶつ

ぼさつ

にじよう

ぼんしやく

してんとう

はか

多宝・十方の諸仏・菩薩・二乗・梵釈・四天等、いかに計ら

たも

にちれんひがごと

ぎ

しめ

たま

い給うぞ。日蓮僻事ならば、その義を示し給え。ことには

にちがつてん

がんぜん

きようがい

ぶつぜん

聞

たま

うえ

日月天は眼前の境界なり。また仏前にしてきかせ給える上、

ほけきよう

ぎようじや

怨

者

こうべしちぶん

わ

とう

法華經の行者をあだまんものをば『頭七分に破れん』等と

ちか

たま

そうら

そうらう

にちれんこうじよう

誓わせ給いて候えば、いかんが候べき」と、日蓮強盛に

責

そうらう

てん

くに

ばつ

せめまいらせ候ゆえに、天この国を罰す。ゆえにこの

えきびようしゆつげん

疫病出現せり。

たこく

くに てん 仰

せ

りようほう

他国よりこの国を天おおせつけて責めらるべきに、両方

ひと 数 多 し

てん おんはか

たみ ほろ

の人あまた死ぬべきに、天の御計らいとして、まず民を滅ぼ

ひと てあし き

だいじ かつせん

して人の手足を切るがごとくして、大事の合戦なくして、

くに おうしんとう 責 傾

ほけきよう おんかたき ほろ

この国の王臣等をせめかたぶけて、法華經の御敵を滅ぼし

しょうほう ぐつう

て正法を弘通せんとなり。

にちれん さどのくに 流

か こく

しかるに、日蓮、佐渡国へながされたりしかば、彼の国の

しゆごとう こくしめ おんはか

したが にちれん 怨

ばんみん

守護等は国主の御計らいに随つて日蓮をあだむ。万民はそ

めい したが ねんぶつしや ぜん りつ しんごんしとう かまくら

の命に随う。念仏者・禅・律・真言師等は、鎌倉よりも「い

渡

はか

もう

遣

かにもして、これへわたらぬよう計れ」と申しつかわし、

ごくらくじ

りようかんとう

むさしのぜんじどの

わたくし

みぎようしよ

もう

極楽寺の良観等は、武蔵前司殿の私の御教書を申して、

でし も

にちれん

怨

いのち

弟子に持たせて日蓮をあだみなんどせしかば、いかにも命

助

様

てん

おんはか

たすかるべきようはなかりしに、天の御計らいはさておき

じとう

じとうとう

ねんぶつしや

ねんぶつしやとう

にちれん

あんじち

ちゆうや

ぬ、地頭・地頭等、念仏者・念仏者等、日蓮が菴室に昼夜に

た 添

通

ひと

惑

責

立ちそいて、かよう人もあるをまどわさんとせめしに、

あぶつぼう

櫃

背負

よなか

たびたびおん

渡

阿仏房にひつをしおわせ、夜中に度々御わたりありしこと、

よ

忘

ひも

さどのくに

う

変

いつの世にかわすらん。ただ悲母の佐渡国に生まれかわりて

あるか。

かんど

はいこう

もう

ひと

おう

そうあ

しん

しこう

漢土に沛公と申せし人、王の相有りとて、秦の始皇の

ちよくせん

くだ

い

はいこうう

もの

ふじ

勅宣を下して云わく「沛公打つてまいらせん者には、不次

しょう

おこな

はいこう

さとなか

かく

やま

の賞を行ふべし」。沛公は里中には隠れがたくして、山に

い

しちにち

にしちにち

あ

とき

いのち

入つて七日・二七日なんど有りしなり。その時、命すでに

終

はいこう

めによ

りよこう

もう

ひと

おわりぬべかりしに、沛公の妻女・呂后と申せし人こそ

さんちゆう

たず

ときどきのち

助

かれ

め

情

山中を尋ねて時々命をたすけしか。彼は妻なればなさけ

捨

すてがたし。

ごせ

思

これは後世をおぼせずば、なにしにか、かくはおわすべ

ゆえ

ところ

追

過

料

き。またその故に、あるいは所をおい、あいはかりようを

引

たく

取

通

たま

ひき、あるいは宅をとられなんどせしに、ついにとおらせ給

ほけきよう

かこ

じゅうまんおく

ほとけ

くよう

ひと

いぬ。法華経には、過去に十万億の仏を供養せる人こそ

こんじよう

たい

見

そうら

じゅうまんおくくよう

今生には退せぬとはみえて候え。されば、十万億供養の

によにん

女人なり。

うえ

ひと

み

がんぜん

こころ

あ

差

離

その上、人は見る眼前には心ざし有りとも、さしはなれ

こころ

忘

そうろう

い

ぶんえい

ぬれば心はわすれずともさてこそ候に、去ぬる文永

じゅういちねん

ことしこうあんがんねん

ごかねん

あいだ

十一年より今年弘安元年まではすでに五箇年が間この

さんちゆう

そうろう

さどのくに

さんど

おとし

遣

山中に候に、佐渡国より三度まで夫をつかわす。いくら

おんこころ

だいち

厚

たいかい

深

おん

ほどの御心ざしぞ。大地よりもあつく、大海よりもふかき御

こころ

しやかによらい

わ

さったおうじ

とき飢

心ざしぞかし。釈迦如来は、我が薩埵王子たりし時うえた

とら

み

飼

くどく

し び おう

ときはと

み

る虎に身をかいし功德、尸毘王とありし時鳩のために身を

替

くどく

わ すえ よ

ほけきよう

しん

かえし功德をば、我が末の代、かくのごとく法華経を信ぜ

ひと

譲

たほう

じつぼう

ほとけ

みまえ

もう

んにゆずらんとこそ、多宝・十方の仏の御前にては申さ

たま

せ給いしか。

うえ

ごしようそく

い

あま

ちち

じゅうさんねん

きた

はちがつ

その上、御消息に云わく「尼が父の十三年は来る八月

じゅういちにち

い

銭

いっかん

文

とううんぬん

十一日」。また云わく「ぜに一貫もん」等云々。あまりの

おんこころ

せつ

そうら

お

したが

御心ざしの切に候えば、ありえて御わしますに随つて

ほけきようじっかん

送

そうろう

にちれん

恋

法華経十巻おくりまいらせ候。日蓮がこいしくおわせん

とき

がくじようぼう

読

ご

聴

聞

おんきよう

時は、学乗房によませて御ちようもんあるべし。この御経

印 ごしよう おん 訪
をしるしとして、後生には御たずねあるべし。

おとし こぞ ことし
そもそも、去々・去・今年のありさまは、いかにかなら

たま

ほけきよう

懇

もう

せ給いぬらんと、おぼつかなさに、法華経にねんごろに申し

そうら

訝

そうら

しちがつ

候いつれども、いまだいぶかしく候いつるに、七月

にじゅうしちにちさるのとき

あぶつぼう

み

あま 御 前

二十七日申時に阿仏房を見つけて、「尼ごぜんはいかに。

国 府 にゆうどうどの

問

そうら

こうの入道殿はいかに」と、まずといて候いつれば、「い

病

国 府

にゆうどうどの

どうどう

そうら

早 稲

まだやまず。こうの入道殿は同道にて候いつるが、『わせ

近

子

帰

はすでにちかづきぬ。こはなし。いかんがせん』とて、かえ

そうら

語

そうら

とき

もうもく

もの

まなこ

られ候いつる」とかたり候いし時こそ、盲目の者の眼の

開

し

たま

ふぼ

えんまぐう

おん

訪

ゆめ

あきたる、死し給える父母の閻魔宮より御おとずれの夢の

うち

あ

夢

よろこ

不思議

内に有るをゆめにて悦ぶがごとし。あわれ、あわれ、ふしぎ

鎌倉

かたもの

やまい

なることかな。これも、かまくらも、この方の者はこの病

し

ひと

少

そうろう

どうせん

そうら

にて死ぬ人はすくなく候。同船にて候えば、いずれも

助

覚

そうら

船

破

助

たすかるべしともおぼえず候いつるに、ふねやぶれてたす

船

あ

りゅうじん

こと

きし

着

けぶねに値えるか。また竜神のたすけにて、事なく岸へつ

ふしぎ

そうら

けるかとこそ不思議がり候え。

谷

にゅうどう

歎

由

あま御

前

もう

伝

さわの入道のことなげくよし、尼ごぜんへ申しつたえさ

たま

にゅうどう

もう

き

そうら

思

せ給え。ただし、入道のことは申し切り候いしかば、おも

い合あわせ給たもうらん。いかに念仏堂ありとも、阿弥陀仏は

ほけきよう

敵

助

たも

法華經のかたきをばたすけ給うべからず。かえりて

あみだぶつ

おん

敵

ごしよう

あくどう

お

悔

阿弥陀仏の御かたきなり。後生、悪道に堕ちて、くいられ

そろう

浅

候らんことあさまし。

にゆうどう

どう

廊

命

度

々

助

ただし、入道の堂のろうにて、いのちをたびたびたすけ

覚

そうら

られたりしことこそ、いかにすべしともおぼえ候わね。

がくじようぼう

墓

常

々

ほけきよう

読

たま

学乗房をもつて、はかにつねづね法華經をよませ給えと

語

たま

かな

覚

あま

かたらせ給え。それも叶うべしとはおぼえず。さても尼の

頼

歎

もう

伝

たま

いかにたよりなかるらんなげくと申しつたえさせ給い

そうら

候え。またまた申すべし。

もう

しちがつにじゅうはちにち

七月二十八日

さどこう

あぶつぼうのあまごぜん

佐渡国府の阿仏房尼御前

にちれん

日蓮

かおう

花押